

新刊
紹介

For some in ancient books
delight ; Others prefer what mod-
erns write : Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

井上勝也著

『新島襄 人と思想』

(晃洋書房・発行一九九〇年二月
A5判・三〇〇頁 二、八〇〇円)

井上勝也教授は現在における新島襄研究の第一人者である。本書は新島の永眠百年に合わせて上梓されたものである。著者は新島の母校であるアーモスト大学で一九七七年から一年間在外研究に従事したが、その時の成果が本書の中心となっている。学園紛争時の大衆団交が著者に同志社教育の根源を鋭く問いかけ、著者自身の教育者、研究者としてのアイデンティティの確立が新島研究に向かわしめたのであった。

本書は『人文学』『同志社談叢』『新島研

究』等に著者が一九七五年以来発表してきた諸論文を加筆訂正の上で一書にまとめたものであるため、ところどころ重複が目立つ。その代り、どの章から読んでもよいという利点がある。巻末の詳細な索引は本書の学術書としての価値を高めるものである。

著者はアメリカ時代の新島について画期的な研究を次々に発表してきた。新島の終生のスポンサーだったハーディー夫妻や、ワイルド・ローヴァー号のテイラー船長の墓の発見をはじめ、テイラー船長の事故死を報じた新聞記事の探索、その現場の検証なども、著者の功績に数えるべきである。

フィリップス高校時代の新島を下宿させたミス・ヒドンについてはアンドーヴァーの歴史協会で調べ、さらに新島が彼女にあてて書いた四十七通の手紙を系統的に調べ、彼女の人となりや新島に対する影響について、読者の知識を一層ひろげてくれる。新島がよく休暇をすごしたコッド岬のテイラー船長の父の家や、プリント牧師の牧師館(ヒンズデール)、アンドーヴァーのヒドン邸等にも足を運んで調べた成果が本書で集

大成されている。

著者は教育学者であるので、新島襄の教育理念の追求はお手のものである。『連邦志略』、ハーディー氏、シーリー教授から彼が学んだ、アメリカのピューリタニズムとデモクラシーと教育の理想といった、三つの精神的遺産を枠組として、著者は同志社の伝統の根源を示すことに成功している。

現在における新島研究を推進する原動力は、井上教授のパトスに負うところ甚大であることを本書は証明する。一人でも多くの同志社人に本書が読まれることを期待するものである。北垣宗治(大学文学部教授)

大泉昭夫・岩崎春雄共編

『チヨースーの英語——研究の課題と方法』

(英潮社新社・発行一九八九年九月
A5判・二三三頁 三、四〇〇円)

本書は一九八七年同志社大学で催された「チヨースーの英語に関する研究者会議」から生れた。序文でこの会議の企画と主旨が大泉氏により回顧的に語られ苦心を偲ばせる。本書を構成する四部分の最初は、紙上

参加の形をとった Ralph W. V. Elliott 教授の基調講演の全文で、中世英語英文学の世界的権威が自著“Chaucer's English”（一九七四年）の意図をそれに対する書評と絡めて更めて述べ、同書以降の主要な研究動向に批判的に触れた好個の読物となっている。

全体の三分の一を占める第二部は四研究報告から成る。技術革新の時代に即して中世英語英文学の研究におけるコンピュータ利用が共通主題であり、序論（久保内端郎）にその可能性、パソコンによるテキスト処理（松尾雅嗣）、Tatlock-Kennedy のに代る Chaucer コンコードダンス計画（米倉紳）、計算機による研究方法（三木邦弘）など、その大きい可能性や付随する問題点が具体的構想と展望を添えて語られる画期的論文を含んでいる。

第三部は三講演から成る。本書が献呈されている、日本の Chaucer 研究の泰斗榊井迪夫氏著の“The Structure of Chaucer's Rime Words”の四半世紀間における世界の学界による受容を跡づけつつ、同書を再考する試み（高橋久）、Chaucer 作品の重要

語 (Key words) について、フィロロジーに徹して各語の現れる文脈、その意図などを詳述して作品理解を深めることを企図したレクシコン作成計画や中世イギリス研究資料センター発行で寺澤芳雄、鈴木栄一、岩崎春雄三氏の協同によるその具体的成果の一斑を示したもの（岩崎春雄）、伝統的詩語を踏まえながらそれを越える詩的言語を創出した Chaucer の偉大さを説き、‘bysnesse’(=business, business) なる語の釈義を廻る真実への興味深い探索へ誘ってくれる（安東伸介）のがそれである。

第四部はシンポジウムでの発表から成る。写字生と写本の伝承との生々しい係わりは日本の数少い権威者の一人（高宮利行）による発表で、この方面での研究意欲を唆るもの。二作品‘Canterbury Tales’と‘Troilus and Criseyde’の諸写本間の異同を法助動詞など統語法の点から観察した成果（小野茂）、当時の修辭字を基準として Chaucer の文体と表現の独自性を豊富な例証で指摘したもの（須藤淳）が続く。最後に『ばら物語』（‘Roman of the Rose’）三部の訳者同定に関する複雑な問題を、網

羅的に文献を読破し検討を加えた上で原著‘Roman de la Rose’と‘Roman of the Rose’の言語研究の不備を指摘し、それらの用語総索引、用語辞典の必要性を提唱する（大泉昭夫）。

以上の諸篇は皆日本 Chaucer 研究の水準と多様性を示すもので、今後の研究動向を明示、示唆する里程標の意義を持つものである。なお又研究基本文献（大泉昭夫）の提示は同学・後学の士に有益な貢献である。全体まとめとしてあとがき（岩崎春雄）が添えてあり便利である。

金山 崇（大阪外国語大学教授）

廣川勝美・駒木 敏共著

『儀礼言語の様式』

（桜楓社・発行一九八九年四月
A5判・二〇四頁 三、四〇〇円）

本書の構成は次のとおりである。

はじめに

I 様式としての神話……………廣川勝美

美

II 神話の表現と祭儀……………駒木敏

第一章 頌め詞としての神話

第二章 神遊びの言葉

第三章 変換装置としての地名

III 神話の鍵語と様式……………廣川勝美

第一章 神話の言語装置

第二章 地名の言語装置

注記

あとがき

この書の意図は「はじめに」(廣川勝美)で尽くされている。饒舌と失語の両極にある現代において「こそ」始原の言葉の復権(五頁)の求められる必要がある。望まれるのは、まさしく言葉の力の回復である。言葉の本質的な営みをより古代に求め、根源的な神話に認める。ここでいう神話とは、「人と神の関係の、相互的な変換を仕掛ける装置としての織物」(七頁)である。神話への視点は「フィールドの奥底に隠し続けられてきた古代への回路の発見」(八頁)による理論的な方法により求められる。言葉の一回性の本質に注目し、「言葉こそ身体であり、身体こそ言葉である」(九頁)という重要な仮説に至る。この仕掛けこそ、本書を貫く根幹をなす柱である。

Iでは、神話の根拠を神話それ自体に求め、聖書学の用語をもつて、テキストの生

成と存立の枠組みとして、様式をキー・タームとする。様式的に織られたテキストに組み込まれる、神名や地名に注目し、神名が重層的な入れ子構造をもつことにおいて、身体に変換する神名こそ根源的な神話であることを明らかにする。IIでは、神の言葉と呼ばれるものの根拠について、儀礼という装置が言葉による配置によって説明されるところに注目する。儀礼の装置性を表現それ自体の中にみとり、とくに、歌謡を対象として、装置として仕組む言葉がいかなるわざを担うかを明らかにする。IIIでは、神名を鍵言葉として『古事記』における天地創成の神話のコスモロジーを解説する。さらに、神話の言葉の本質にかかわる問題として、言葉の呪性がわざのもつ媒介性にあるとして、タブーを論じる。さらに地名を鍵語として、『風土記』が、宇宙と身体との入れ子構造に配置される、重層的に織られたテキストであることを明らかにする。

この書は、細部に至るまで、長期間にわたって練られた綿密な研究成果である、ということが強く印象づけられる。とても要

約することはできないし、紹介の任に堪えない自らの無学を恥じるばかりである。だが、確実にいえることは、テキストの解説と解釈にかかわって、この書は国文学の、いわゆる上代の専門的研究書であることはもちろんのこと、問題提起するところ、現代に及ぶ射程距離をもつていよう。文学の問題として言葉そのものの、表現そのものを解明することにこだわるといふ、難解な課題にまさしくわけ入った点で、これからの研究方向を見定めた画期的な書である。

廣田 収(大学文学部助教授)

幅 健志著

『会議は踊る——帝都ウィーン物語』

(三省堂・発行一九八九年十月
B6判・三五九頁 二、五〇〇円)

ほんとうの都というのは世界に二つしかない、ウィーンと京都である、と言った人がある。けだし名言と言わなければならない。パリにもロンドンにもなくて、或いはプラハやペテルブルクにもなくて、ただこの二つの都市にのみ共通してあるものを、

鋭く見抜いているからである。すなわち、牢固として抜きがたいアナクロニズムのこ
とだ。さて、その優雅なる、しかし度しが
たいアナクロニズムの西の牙城、花の都は
ウィーンの宮廷を舞台にした、ナポレオン
失脚直後の世紀のサミット、ヨーロッパ列
強の一大談合「ウィーン会議」の顛末と、
それをも食いものにしてしまおうというし
たたかなる市井の名もなき庶民の繰りひろ
がるてんやわんやの大騒動を、絶妙の語り
口で鮮かに活写したのが本書である。華麗
なる肥溜めの中の、おかしくてすこし哀し
い人間喜劇を描いて、まことに楽しい本で
ある。もとより著者には歴史の教科書まが
いのものを書く気などてんからないので、
のっけから、ナポレオンは「女とパリは留
守にしては駄目だ」と洩らしたらしい、な
どというアヤしげな文章が出てきて読者を
ウレしがらせてくれる。巷談とか、いつそ
講談とか銘打ってはどうかろう。香具師だ
のペテン師だの、泥棒、ばくち打ち、娼婦
だのおおいに活躍するのだから、事実を
並べるだけでも充分面白いはずだが、なに
しろここの手合いの話となると、その事

実なるものも記録などやたらあるわけもな
く、よいいくらか見つけたところで、ま
ず肩に唾してかかるのが賢明というシロモ
ノに違いない。そうであれば、著者みずか
らしばしば講釈師のマネごとをするのも無
理からぬ話ではあるまいか。だが心配する
にはあたらない。史実とやらを扱えば、歴
大な史料を渉猟していちいち綿密に点検
し、その要所要点はきっちり押さえて抜か
りがないから、勘所はけつしてはずさない。
とはいっても、前述べた通り、やつぱり
どこかしら講談である。見てきたようなこ
との二つや三つはそこらに転がっているか
もしれない。老婆心ながら、読者諸兄姉に
は、行間と紙背とからゆめ目を逸らさぬよ
うご注意ください。さよう、はつき
り言えば、著者にはからからに干涸びた歴
史などではなく切れれば真っ赤な血が吹き出
したのである人間どもの真実を求めて、薄
皮一枚ほどの虚実の間に斬りこむために、
時に舞文曲筆の危うい綱渡りすら恐れない
覚悟があった。そうやってはじめて歴史と
斬り結び、歴史を形成した生身の人間ども
を今に生き返らせることができることを、

彼は十分に心得ているからである。とまれ
かくまれ長講一番『ウィーン列国会議・外
伝』読み切りの一席は、張り扇の音も冴え
て、著者会心の名調子だ。木戸銭は安い。

山本雅昭（大学工学部教授）

亀山都夫著

『甦えるフレイブニコフ』

（晶文社・発行一九八九年十月
A5判・四〇二頁 六、八〇〇円）

思うに、二十世紀における天才（この概
念そのものは多分に前世紀的なものではあ
るが）の型というのは二つにわかれるので
はないだろうか。すなわち、ピカソやマイ
ルス・デイビスのように、つぎつぎと新し
いスタイルを創出しては、乗りかえていく
型と、ジョイスやデュシャンのように、芸
術の可能性を極限までつきつめ、可能性を
可能態のまま提示する型と。いうまでもな
く、ロシア・アヴァンギャルド最大の詩人
ヴェリミール・フレイブニコフは後者の型
に属する。
可能性の芸術家はとてつもない可能性を
開示することによって不可能性の芸術家と
なるわけだが、彼の可能性を語る方法も、

また、二通りある。一つは、可能性の中心をなす概念の幾何学を説明する方法、一つは、そうした概念の気配や雰囲気（エロティシズムといってもよいだろう）を語る方法である。そして、概念のエロティシズムを語るのは概念の幾何学を説明するよりも困難である。なぜならば、概念のエロティシズムを語るには、当の芸術家に匹敵するだけの想像力をもたなければならぬからだ。本書は、可能性の詩人のもつ、概念のエロティシズムを、どこまでも艶やかな言葉で描ききっており、このことは、著者がフレーブニコフの詩的言語に伴走するだけの脚力を備えていたことを示している。

では、フレーブニコフの可能性の中心はどこにあるのだろう。一言でいえば、それは「普遍性」ということになる。彼のいう「普遍性」は共同体・国家の枠をこえた、世界交通にねざす「法則」をさし、それは「自織語」や「超理性語」を基礎とする壮大な「世界言語」に端的にあらわれている。科学とも夢想ともつかない「普遍性」の発見は、共産主義のインターナショナルティと快い響きをかわしあっているように思われる。

フレーブニコフが普遍的法則を探す対象となったのは、言語ばかりではなく、時間・歴史の領域やアジア・アフリカの神話・宗教世界もそうである。われわれはフレーブニコフの作品に、「世界言語」の饗宴のみか、「四次元」の見事なイメージや死と再生の高致な物語をも楽しむことができる。こうした詩的偉業を吟遊詩人のように放浪の先ぎでなしとげたフレーブニコフは、ロード・ムービーならぬロード詩人と呼ぶに値するだろう。

可能性の詩人を甦えらせた本書の可能性を正確に伝えることは、とても評者の力のおよぶかぎりではないけれど、つぎのことだけは保証しておこう。本書を手にする者は、世界で最もアヴァンギャルドな一瞬を味わうことができる、と。

大石雅彦（文学経済学部専任講師）

河野仁昭著

『京都 現代文学の舞台』

（京都新聞社・発行一九八九年九月
B6判・二三六頁 一、五五〇円）

文学作品の楽しみ方、味わい方についてはさまざまな方法がある。とはいえ、いか

なる方法であっても、前提となるのは、あくまでも通読して、はじめて得られるものであるのはいうまでもあるまい。そんな読書の楽しみ方の一つとして、文学散歩がある。詩人の野田宇太郎の著書でも知られるが、作品の舞台散歩は、文脈のなかでの舞台の占める意味ばかりでなく、作家がそこを選び、思ったであろう心の動き——ときに思い過ごしもあるけれど——までが時間を超えて読者に想像させ、作品の理解をより深くしてくれるのである。

こうした読書の楽しみ方としての文学散歩を、著者の日常的な読書からまとめたのが、本書である。収録されているのは、白川書院新社の月刊雑誌「京都」に、一九八七年一月から二年間にわたって連載した「京都文学作品の舞台」を軸に一家一編を原則にした三十八編。作家は、明治から現代までで、京都を舞台とした作品を選んでゐる。

「巡り歩くそれぞれの場所が、ひとり作家の人生や文学にかかわりあう意味あい、一編の作品の中に占める位置、客観的な実像と作品化された像のちがいが、そういったこ

とを、より多く集積してみたい。それも文学を楽しむ有力な方法の一つだといって間違いないだろう。文学のフィード・バックなどということばは奇妙かもしれないけれども、いわゆるフィールド・ワークによる作家の作品の理解ないしは楽しみ方を、私は邪道とは思わない」と、「あとがき」に記しているように、著者にとつての文学散歩は、単に舞台探しにとどまらない。作家が作品を書いた背景をたどりながら舞台に触れ、作品論に展開しているのである。

京都を舞台にした文学は多い。京都を舞台に何作もの作品を書いている作家もある。本書に収録の三十八編の選択は、著者によつてかなり意図的である。小説があれば、歌集があり、詩集もあるといったぐあい。大したことはないが、作家ではよく知られる坂口安吾、円地文子、船橋聖一の作品がないのが気になるところだ。しかし、著者にとつては網羅的な文学ガイドというより、自らの読書生活に即しての選択であり、それが逆に本書を特徴づけているといつてよいだろう。選ばれた作品には、文学を日常に取り込みながら自由に思索を広げ

ていくという著者の読者姿勢がうかがわれる。読み進めるうちに作品の興味と再訪を惹起させてくれる一味違った手作りの、楽しい文学散歩である。

杉田博明（一九五八（昭和三十三年）大学法学部卒業・京都新聞社編集局編集委員）

中條 毅 編著

『高齢化時代—生がい・労働・生活—』

（中央経済社・発行一九八九年七月）
A5判・二〇八頁 二、八〇〇円

著者の中條毅教授は、本学の産業関係論の教授であるが、三年前より設立された社団法人、関西国際産業関係研究所（理事長、大宮隆宝酒造株式会社会長）の所長として、幅ひろく労使関係の研究をすすめると共に、産業社会で働く現場の企業人や組合指導者たちの交流の中に貢献しておられる。

わたしは、ここ十数年来、中條教授とともに関西セミナーハウスで開催されているIMF・JIC（全日本金属産業労働協、西日本労働リーグシップ・コースに参加させていだいてるが、教授がいち早く高齢化社

会の課題を取りあげて、研究を促進しておられることを注目していた。

本書は、高齢化社会の進展と若年労働の減少によつて、九〇年代に日本の労働力の不足時代が到来するが、外国人労働者の導入によつて対応する前に、日本の中高年労働者の再編と育成・活用」がなされることが重要であることを多角的に論じている。

総論においては、中條教授が「人間の寿命と残した業績」（第一章）という題で、日本の戦国時代の人物の生涯と業績をかえりみ、そこから今日への教訓をくみとつていく。この部分の叙述は、きわめて説得力があつて面白い。つづいて「生涯設計と高齢化時代」（第二章）、「定年制と就業実態」（第三章）、「高齢者の労働能力」（第四章）などが論じられ六〇歳代前後の労働力の活性化が検討されている。

各論においては、八人の学界の専門家にちによつて、「高学歴・高齢化と年功賃金制」「退職後の生活」「社会変化と女子雇用」「中高年女子労働者」「雇用と定年延長」「政治

参加」「消費構造と生活意識」「生きがいとレジャー」などの課題が、高齢下社会の関連において取りあげられている。さらに、本書の後半には、宮田義二元鉄鋼労連委員長、前川朋久松下電器産業労組中央執行委員長、梅村志郎元ヨタ労連委員長の三氏が、日本を代表する鉄、電機、自動車の労組指導者として高齢化社会への対応を論じ、この書物を一層現実的なものとしている。ここいらにも、多様な人脈を大切にしている研究をすすめておられる中條教授のアプローチをうかがい知ることが出来る。

竹中正夫（大学神学部教授）

恒藤武二編著

『労働者保護法——労働基準法を軸として——』

（ミネルヴァ書房・発行一九八九年六月）
A5判・二五三頁 二、四〇〇円

恒藤武二教授は、大正八年八月三十一日のお生まれであり、平成三年三月三十一日をもってめでたく定年をお迎えになる。先生は、昭和一八年九月、同志社大学法学部経済学科を御卒業になられ、同月にただちに法学

部助手として奉職されてのち、今日まで法学部に所属され、昭和三六年四月から昭和三七年三月まで、および昭和四二年四月から昭和四三年三月まで法学部長をお務めになられた。筆者は、昭和四二年度の恒藤ゼミ所属であり、保管している卒業証書には、恒藤武二法学部長の名がおさめられている。

恒藤先生は、労働法および法哲学ないし法思想史について深奥を極められ、またフランス語がまことに堪能であられる。代表的な著作として二、三を挙げてみると、『フランス労働法史』（日本評論社）、『労働基準法』（ミネルヴァ書房）、『法思想史』（筑摩書房）などがある。また先生は、ルソー研究の権威者として、『ルソーの社会契約説について』（同志社法学三号）をはじめとして、ルソーに関する一連の論文をのこしておられる。その意味では、恒藤先生は、法学部が誇ることできる超一流の学者ということができる。

本書『労働者保護法——労働基準法を軸として——』は、恒藤先生の編著によるものであり、昭和四六年に出版された『労働

基準法』（ミネルヴァ書房）と継続性を有するものであるが、ほぼ全面的に新たに書き下ろされたものである。本書を分担して執筆された方々は、青木紀博（京都大学文学部専任講師）、香川孝三（同志社大学文学部教授）、唐津博（富山大学経済学部助教授）、竹中康之（同志社大学大学院法学研究科博士課程）、山田耕造（香川大学法学部助教授）の諸氏である。いずれも恒藤先生の御指導をうけてこれた方々であり、先生の御意図は本書の分担によってさらに薫陶を深めることにあつたものと思われる。

本書は、労働基準法を軸として展開されている労働者保護法全体にわたって重要な論点を絞り、一貫して批判的態度をとることに心がけて執筆されている。とくに新たな法制度として注目される労働時間法制、男女雇用機会均等法、労働者派遣法、パートタイマー法制の中で、日本の将来を見通して種々の警告を発せられているのが本書の特色といえよう。感性豊かな学生達にとって、本書のようなテキストは清涼感をも

って迎えられるにちがいない。

恒藤武二教授は、筆者にとって最大の恩

師であるが、先生に育てていただいた研究者はきわめて多数にのぼっている。一同で先生の今後ますますの御健康とさらなる御健筆を心からお祈り申し上げたい。

安枝英誦（大学法学部教授）

石倉三雄著

『地場産業と地域経済』

（ミネルヴァ書房・発行一九八九年三月）
（A5判・三八〇頁、四、〇〇〇円）

戦後の日本経済は石油危機を契機に経済の成長力だけでなくその他の経済社会情勢の基調に大きな変化がみられた。高度経済成長を演出してきた国の行財政システムや国土開発ビジョンに対する批判が本格化したのもこの頃からである。したがって、中央集権的経済主義、全国画一的政策に代わって地域分権の問題意識が色々のところで議論され、地方の時代が声高にうたわれてからかなりの時間の経過をみているのである。しかし、東京への一極集中化はその間も進行し、石油危機後のサービス化、情報化、国際化を新たな集中力とさしている。それだけに、今、地方の活性化が真剣に考えねばならないのである。このような問題

意識を地域社会の独自性をキーワードとして、地場産業が地域社会に果たす役割の重要性を解明して、経済活力についての一つの考え方を明らかにしたのが本書である。

目次を紹介すると、次のようになっている。序章・地域開発と地場産業、第1章・地場産業の構造、第2章・家庭用仏壇製造業の現状と課題、第3章・伝統的工芸品産業の構造分析、第4章・伝統的工芸品産業の法的側面の検討、第5章・伝統的工芸品産業の統計概要、第6章・伝統的工芸品産業と家族経営、第7章・伝統的工芸品産業と「人間の顔を持った技術」、第8章・明治前期の伝統的工芸品産業、結章・新しい地域社会と地場産業、

このような構成を通して、著者は「地場産業は当該地域に根づいた地域固有の産業として、その経営資源をフルに活かしながら、地域内経済循環のパイプを増大させる最たる産業の一つである。このような地場産業の活性化こそが現下の東京圏への資本・人口の一極集中を緩和・是正する一助ともなりうるであろう」と、主張するのである。

衣本肇彦（近畿大学商経学部教授）

水野正一・河合宣孝・竹内信仁編著

『現代経済学』

（中央経済社・発行一九八九年十二月）
（A5判・三八一頁、三、二〇〇円）

本書は初級レベルの近代経済学の教科書である。数多く出版されている入門的な教科書のなかで、この教科書が出版された理由は、編著者が「一握りの知的エリートのみが経済学を学ぶといった時代ではない。難解な教科書で悪戦苦闘して時間とエネルギーを浪費するよりも、行き届いたわかりやすい教科書で基礎知識をしっかりと身につけるほうがはるかに賢明」であり、その目的からすると、いずれの書物も「帯に短かしたすきに長しの感が否めない」と判断したからである。この意図にそった本書は、近代経済学の重要なエッセンスを平易に説明することに成功している。また、二色刷りの図解や現実の統計データの利用、さらには、各章末の練習問題や巻末の主要用語の解説が、読者の経済学への理解に大いに役立っている。

本書は5部構成になっているが、実際には経済学の基本的諸概念、ミクロ理論、マ

クロ理論の3部門で構成されていると考えられる。まず、第1部(第1〜4章)では、経済学の基本的な考え方、ケネーの重農主義から現代経済学に至るまでの学説史の概観、資本主義と社会主義の間に横たわる経済体制の違いなどが、手際よくまとめられている。第2部(第5〜11章)では、ミクロ経済学の基礎である消費者および生産者行動の理論を中心に、市場取引の役割と限界(「市場の失敗」)が説明されている。そして第4部の「経済と公正」では、経済活動の重要性が効率面だけでなく、分配面も無視できないことを認識させるために、所得分配(第22章)と社会保障(第23章)の項目にもページが割かれている。第3部(第12〜21章)では、マクロ経済学の基本的な枠組みや諸概念、経済活動のサイズを決定する要因、さらには、金融・財政政策の役割が説明されている。そして第5部の「開放経済」では、第3部のマクロ経済学の延長として、国際貿易(第24章)と国際金融(第25章)の理論が、国内経済との係わり合いの中で展開されている。

一冊の書物としては盛りだくさんな内容

になっているが、これは年間25時限(1時限90分)の講義で、1時限1章分のペースで1年間で完了することをメドに編集されているからである。したがって、このペースで本書を活用していけば、近代経済学を理解する上で欠かすことのできない知識が充分習得できる。近代経済学への誘いとしては、薦めたい入門書である。

西村 理 (大学経済学部教授)

奥野正寛・篠原総一・金本良嗣編

『交通政策の経済学』

(日本経済新聞社・発行一九八九年九月)
A5判・二五七頁 二、一八〇円

本書は、交通経済学の専門家と、産業組織論などのミクロ経済学の分野で理論的研究を進めている研究者との共同研究の成果である。多様な分野の研究者が参加しているにもかかわらず、統一性が保たれているのは、日本の交通問題を念頭におき、新しい経済理論からのメッセージを読み取るというスタイルが貫かれているからに他ならない。ここで「新しい経済理論」を援用するのは、日本を取り巻く経済環境が大幅に変化する中で新しいタイプの交通問題が生

じ、これまでの交通政策を見直す際に、過去の経験が参考になるという保証がないからである。

新しいタイプの交通問題は、序章「交通政策に関する素朴な疑問」として提起される。ひとつは、都市部の交通投資が、経済活動が大都市へ集中していくペースに追いつかなかった結果生じた混雑問題であり、第I部「交通料金と投資政策」で議論される。都市住民の生活の豊かさを奪っている混雑問題が、料金政策(混雑料金)と投資政策(開発利益の還元と費用便益分析による投資決定)によって解決可能なことが、明快に示されている。

いまひとつの問題は、規制緩和の世界潮流の中で、極めて規制の多い交通政策をいかに見直していくかということである。それは、第II部「交通をめぐる規制の経済学」で、最近発展したコンテストバリティの理論や情報の経済理論を用いて分析されている。

本書の政策提言が説得的なのは、分析に用いられた経済理論が斬新で合理的であるためだけではない。加えて、理論の適用可

能性について、次善問題にまで言及していること。さらに、第一部・第二部での理論的理解に基づいて、第三部「交通政策の現状と課題」の中で、日本の交通問題の現状を具体的に分析しているからである。そのうち第8章「航空」は、榊原胖夫氏が担当されている。そこでは、航空における規制政策の歴史的根拠からアメリカでの規制緩和の実験とその評価まで緻密に分析され、先の理論的分析で提起された規制政策の見直しの必要性を、現実との関連で裏付けている。さらに、日本で規制緩和を進めていく上で障害となる空港問題について、現実的対応策が展開されている。

本書は、経済理論が交通問題の解明に十分有用であることを教えてくれる。その意味で、これまで地理的・歴史的要因を重視するあまり、交通の特殊性を強調してどちらかといえば理論的分析を遠ざけてきた交通研究に、新しい息吹きと確かな指針を与えてくれたといえよう。

高橋 望（京都産業大学助教授）

小林良彰著

『昭和経済史―激動の六十四年を考察する―』

（ソーテック社・発行一九八九年八月）
B6判・三七五頁 一、八〇〇円

「激動の六十四年を考察する」とサブ・タイトルがついているように、本書は昭和全体を通観する日本経済史である。昭和の終焉とともに昭和史ブームがつづいたが、ブームに迎合したものではない。けだし、著者が西洋経済史を専攻するだけにつねに世界の動きとの関連をみすえながら日本経済を分析しているからである。フランス、イギリス、アメリカなどにくらべて「それは日本の現状はどうか」という問いかけがその背景にある。

さて、内容を簡単に紹介しておこう。そもそも昭和は、金融恐慌からはじまる。本書ではこれを、大正後半の経済状況から説きおこしている。金融恐慌はさらに世界恐慌へと展開し、日本経済を不況のどん底に叩き込んだ。

その打開策のなかで満州事変が引き起こされ、軍需インフレを招く。軍需産業の成

長とともに日中戦争がおこり、戦時統制経済に入る。戦前の記述は簡潔であり、戦争経済にはふれられていない。

他方、戦後期には大きいウエイトがおかれている。まず敗戦による荒廃と貧困のなかでの占領軍による改革が論じられている。例えば、「財閥は復活したか」について「改革の成果は失われていない」と評価している。

インフレと経済再建、安定恐慌と朝鮮戦争のあと、昭和三十年代末ごろは再編成の時期である。財閥復活が論じられ、第一次産業合理化、外資導入が展開する。

昭和三十年に入ると高度成長期となり、数量景気、神武景気、なべ底景気、岩戸景気とつづく。この過程で、重化学工業が成長し、エネルギー革命がつづき、農業機械化がすすむ。また、貿易自由化とともに貿易構造が大きく変わり、流通革命がおこる。

昭和四十年代半ばからは、ドル・ショック、石油危機、世界的不況のなかで政策転換にせまられる。

昭和五十五年ごろからは産業構造が重化学工業中心からハイテク産業へと新しい局

面へ変化し、経済のソフト化がとりあげられる。

昭和経済の終着点では、昭和六一年の円高不況から内需拡大による経済の好転へと展開し超大型景気ははじまり、金融革命と国際金融センター化がすすむ。

ともあれ、本書は「一通りの現代経済史の完結した物語」というように読みやすい通史である。より深い分析が望まれる問題点もあるが、昭和経済の全体を、とくに昭和の終着点まで含めて概観した書物としてすぐれた成果である。

内田勝敏（天学商学部教授）

内田勝敏編

『イギリス経済——サッチャー革命の軌跡——』

（世界思想社・発行一九八九年一月
B6判・二七六頁 二、三〇〇円）

一九七九年に登場したサッチャー政権は、第二次大戦後のイギリス経済の長期衰退（いわゆるイギリス病）を克服し、イギリス経済の再生をめざして、これまで約一〇年間にわたってさまざまなドラスティック

な経済政策を進めてきたが、現在いろいろな面で行きづまり、大きな曲がり角に直面しているようである。

本書は、内田教授を中心とする研究グループの共同研究の成果で、「一九七〇年代から八〇年代のサッチャー政権のもとでのイギリス経済の転換・展開過程の基本的性格と意義を明らかにし、イギリス経済の将来を展望すること」（はしがき）をめざしたもので、総論、産業、対外関係、国内経済の四部に分かれ、全体が一〇章で構成されている。

本書の特徴は、表面的な現象にとらわれることなく、あくまで経済学的な現状分析をめざし、終始批判的な視点が貫かれていることである。たとえば、八〇年代にみられる生産性の劇的な上昇（いわゆる生産性ミラクル）も、近代化・技術革新を背景とした設備投資の拡大にもとづく本来の上昇ではなく、資本価値の破壊をとまなう非効率企業の閉鎖と過剰雇用の整理、失業の増大によるうしろ向きの消極的な上昇に過ぎなかったことが見事に説明されている。さらに、産業構造・産業政策、民営化政策、

国有産業の解体、海外投資、金融政策、財政政策とくに地方行財政改革、農業政策などの各局面が丹念な実証をつうじて考察されており、教えられるところが多大である。

サッチャー政権の経済政策は、上述のようにならざるイギリス病を克服し、国際競争力の強化をつうじてイギリス経済の活性化をはかるために、従来のケインズの総需要管理政策を排し、通貨供給量の調節を重視するマネタリズムの考え方に立つて、競争と市場メカニズムの積極的活用をめざしたものであるが、本書の分析によるとその結果はせいぜいインフレの抑制にある程度成功したくらいで、全体としては思わしいものではなく、イギリス経済の再生にはほど遠いようである。サッチャーの政策は、アメリカのレーガノミクスと並んでいわゆる新保守主義の一環をなしているが、このような傾向と世界資本主義体制との関連についても研究を進めて欲しいものである。

本書は、おそらくサッチャー経済政策についてのわが国における最初の本格的な研究成果であり、示唆に富む内容をもってい

る。

藤村幸雄（大学経済学部教授）

西村豁通者

『現代社会政策の基本問題』

（ミネルヴァ書房・発行一九八九年十月）
（A5判・三一二頁 三、六〇五円）

——遙かなる「論争」の呼び声、ご自身こそ阿修羅——。新聞の見出し風にタイトルを付けるとすると、このようになるのではあるまいか。現代の大学人の多くには、既に茫洋として像も結ばぬ遠い過去になつてしまった、戦後の社会政策本質論争というものがある。論争の当事者であつた著者は、「福祉国家から福祉社会へ」、「総合社会政策」、「ソーシャル・ポリシー」といった。まさに同時代的な現瞬間的なテーマを語りかけながら、読者の脳髓に、思いもかけぬ彼方の過去からの、呼び声を響かせるのである。

この書は、標題から知れるように、理論研究の書であり、全編がボレミクで埋め尽くされている。簡潔にして鋭利なその舌鋒は、切られたものがしばらく痛みを自覚出来ないような類いである。へ修羅おき生さざまとおくかぞう日や、ゆき象をおおい

六十路に入りぬ。このうたは、著者が以前の編者のあとがきに付けられた、ご自身の一首である。論争の修羅場をくぐり抜けて生き抜いて来られた感慨がこもつたものと拝察するが、この書を改めて通読した後は、実はご自身こそ戦上手の阿修羅だったのではなかったか、という思いが湧くのである。

大河内理論、岸本理論に対抗して、「搾取形態の変容」をキー概念として論陣を張り、絶えず歴史的に展開する新しい社会政策的事象に、果敢に挑み続けながら、「自助の補充」という新しいキー概念を獲得し、今日の現役として活躍し続けている著者の姿は、後輩の手本である。

今少し特殊な内容に触れれば、岸本理論の出生の秘密を証している部分や、占領下に積み残した社会政策である最低賃金制を巡る論争の評価には、後人が教えられること多いし、日本労働組合運動の戦略としての「構造改革」論や、医療保障における医療供給体制問題への論及は、若者には既に分かりにくい時代のものだが、ここには、利害関係人が多く、しかもそれぞれに社会

的に有力な領域に、恐れず分け入つてもの申している、著者の孤高にして不羈の理論家の相貌が輝いているのである。

荒又重雄（北海道大学教授）

河野 収編

『コンピュータ基本用語辞典』

——独一日一英——

（同学社・発行一九八九年六月）
（新書判・五三六頁 二、九一〇円）

いままで、コンピュータ関係のドイツ語文献に接したとき、化学ドイツ語辞典のようなハンデイーなコンピュータ用語辞典があればといつも痛感させられたものでした。本書は、このような要望にダイレクトに応えてくれるものです。編者の河野収教授は、ドイツ文学と情報処理、ドイツ科学用語などの研究を専攻され、工学部で外書講読を担当されており、本書の編者としてまさに適格の人であると思います。

本書は、まえがき、凡例、計算機のあゆみ、本文、索引の5項目から構成されています。「計算機のあゆみ」は、ハードウェア発達小史であり、写真入りの楽しい短篇と

なっています。また、この種の年表は、アメリカ一辺倒になり勝ちですが、本書では Zuse の業績がかなり詳しくとり上げられているのが特徴です。

さて、本文には、コンピュータのハードウェア、ソフトウェアに関する用語を中心に、エレクトロニクス、データ通信、OA、経営科学、数学、論理学、言語学……と、かなり広範囲なすそ野まで、七千余語のドイツ語の見出し語が収録されており、各ページは、見出し語と訳語・解説を左右に分割した、たいへん見やすい版組みで構成されています。また訳語として、日本語と英語が記述されており、図こそ使用されてはいませんが、必要に応じて、気のきいた短かい解説が加えられています。例えば、Menge を引くと、「集合（対象の範囲がはっきり定められたものの集り……美人の集まりは集合ではない）」と言った具合です。最後に索引は、英語、略語、日本語の各篇が用意されており、編纂にコンピュータシステムが用いられているため、検索ページはきわめて正確です。この索引は独一日英の用語の対応づけにたいへん重宝であ

り、筆者の場合、逆引きによって、日→英の用語集としても利用しています。

本書に収録された語数が多いか少ないかは、当然、利用者によって感じ方が異なることでしょう。筆者の限られた利用経験では、たいへん充実していると感じています。ただ、この分野はきわめて進歩が速く、次々と新しい用語が誕生してきます。とくに略語の場合、この傾向は著しいようです。このとき、例えば GCM のように英・独共通のものばかりやすいのですが、プログラマブル、コントローラのドイツ語略 SPS (Speicher programmierbare Steuerungen) などの略語は、英語側から検索できないため、増補の機会にぜひ収録していただきたいものです。またドイツで標準的に使われているコード表を付録につけていただければと思います。本書が座右の書として、広く愛用されることを願うものです。

田中幹也（工学工学部助教授）

同志社大学人文科学研究所編

『排耶論の研究』

（教文館・発行一九八九年七月
A5判・三六四頁 五、八〇〇円）

本書は人文科学研究所のキリスト教社会問題研究の共同研究による論文集で十篇の論文と排耶文献解題より成る。杉井六郎氏の「まえがき」では、この研究の狙いとして、キリスト教を排撃する伝統的思想・近代思想（進化論・社会科学思想の論理とその運動の検討ばかりではなく、その排撃に対するキリスト教側の対応の検討の必要性を強調している。以下配列順に各論文の概要を簡単に紹介してみたい。

露口卓也氏の「水戸学派の排耶論」では、徳川斉昭と会沢正志斎を取り上げ、伝統的思想からの排耶論を検討している。杉井六郎氏の「排耶のなかの私学同志社の創業」では、「私塾開業願」における学科中の聖經・外国人宣教師雇入と聖書講義の問題を取り上げ、排耶に対するキリスト教側の対応を検討している。島尾永康氏の「進化論者の排耶論と神道著述家の十字教観」では、主にモースのダーウイニズム講演とフェノロサのスペンサー進化論導入による排耶論を取り上げ、それらに対するキリスト教側の反撃を検討している。坂口満宏氏の「一八八〇年代・仏教系の反キリスト教運動」

では、斎藤吾一郎の『耶蘇教国害論』と藤島了穂の『耶蘇教之無道理』を取り上げ、さらに各地における排耶結社の実態や仏教講談会の活動を検討している。竹中正夫氏の「排耶論にこたえた宣教師たち」では、M・L・ゴードンの『仏教頼むに足らず』とJ・L・アッキンソンの『シダルトの王子』を取り上げ、キリスト教側の仏教研究を検討している。

笠原芳光氏の「井上円了の排耶論」では、『真理金針』を取り上げ、合理主義と仏教思想からの排耶論を検討している。沖田行司氏の「杉浦重剛の『理学』思想と排耶論」では、『教旨弁惑』その他を取り上げ、宗教・科学・教育の間を揺れ動く思想展開を検討している。宮澤正典氏の「危機意識としての排耶蘇と反猶太」では、幕末・開国期の排耶論と大正期の猶太禍論を取り上げ、両者の思想構造の共通性を検討している。佐伯友弘氏の「明治三十二年私立学校令の成立過程にみる反キリスト教」では、高等教育会議や閣議・法典調査会や枢密院の議事録を取り上げ、そこで表明された反キリスト教の意見を検討している。田中真人氏の

「共產主義者の反宗教運動」では、日本戦關的無神論者同盟を取り上げ、共產主義運動における反宗教運動を検討している。

以上この論文集は、幕末期から昭和初期に至る代表的な排耶論とその運動、さらにそれに対する主としてアメリカン・ボード系のキリスト教側の対応を検討しているのである。各論文は六年間にわたる共同研究を土台として執筆され、研究会では排耶書の徹底した検討がおこなわれた。しかし、本書に盛り込まれなかったテーマや、なお未見の稿本類なども残されており、この研究のさらなる継続を期待したい。

山田芳則（就実女子大学助教授）

同志社談叢

第十号

論文

新島襄晩年のころ……………竹中正夫

—その「畢生の目的」をめぐって—

新島襄の大学設立運動（二）……………河野仁昭

父・久永機四郎の記……………久永省一

—新島襄の小さき弟子の一人として—

山崎為徳詳年譜……………高橋光夫

高標元一郎の柏木義円宛書簡をめぐって……………室田保夫

資料

新島襄葬儀記録……………

亡愛夫妻発病ノ覚……………新島八重子

新島襄に関する文献ノート……………

（その八）……………河野仁昭

『新島襄全集 第五巻—日記・紀行編』……………

人名索引……………加茂正典

発行・同志社社史資料室……………

取扱い・同志社収益事業課……………

電話（〇七五）二五一—三〇三七・八……………